
魔法 = 譜学？記憶の先には何がある？

五作

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法Ⅱ譜学？記憶の先には何がある？

【Nコード】

N1753Y

【作者名】

五作

【あらすじ】

魔法Ⅱ譜学？

記憶を探し右往左往、バトル、笑い、恋愛、シリアス、何でもござれのストーリー！。

彼は果たして記憶を取り戻せるのか？そしてその先には一体何が！？
なかなかの駄文です（笑）

世界観（前書き）

初の投稿です。ぐだぐだ感が否めないかな？

世界観

世界には魔法が存在している。

魔法は人々の生活の中心にある

魔法を研究し、使い易くされたのが、譜学と呼ばれる。

魔法＝譜学という意識が一般常識とされている。

譜学には一く三までありそれぞれ呼び方ある。

一般的には第一譜学”シガク詩学”

冒険者には第二譜学”シラベ調”

国家間には第三譜学”ウツシ写”と呼ばれる。

冒険者の第二譜学”調”には色々種類が派生していて今でも増えている。

この物語りは、一人の譜学術師による記憶を探す物語である。

世界観（後書き）

こんな感じですか？暇があれば投稿します。

プロローグ（前書き）

一部変更しました

プロローグ

・とある国にて・

「ふああゝ、ああゝ眠っ」

大きな欠伸をしながら青年は歩いていた。

「此処にも情報は無しか、はあゝ、いつになったら会えるんだろう？」

彼はぼんやりと考えながら空を見上げて言った

「僕の　　の手がかりの人は……………」

・とある南方の国にて・

「まだ見つからないのか…………」

「はい、四愧死しきじに探すようにしていますが、未だに成果は現れて

いないようです……」

「一体何処にいるのだ…私の　　は……」

「主様、私も搜索にむかいます。アイツのことは我々に任せて主様は一刻も早く　　を取り戻し下さいませ。」

「ああ、分かっている。ヤツのことはお前たちに任せるぞ……、私は少し眠る。後は頼んだ。」

「承知」

そういつて二人の会話は終わり、残ったほうは上を見上げ

「一刻も早く　　を取り戻し、ヤツを見つけないければ……全く一体何処にいるんだ　　始まりのdoorは……」

そういつてゆつたりと目を閉じた。

ブログ（後書き）

ブログなのにいきなり確信になりつつある。

文才が欲しい

第一話〜出会いと依頼〜（前書き）

取り敢えず第一話です。

第一話　出会いと依頼

北部大陸の一番端アルトーという国の冒険者ギルドに二人の男がいた。

一人はアレス・エクステルといい、つり目で、明らかに怒っている。もう一人はダルク・ライウムという名で、大男な風体なのに、縮こまり怒られていた。

「このバカ！誰が報奨金の全てを貴様に一任すると言ったんだ！私は貴様に預けると言っただけだ！」

「だから悪かったってばくばく…この通りさくもぐもぐ…」

お分かりかもしれないが一方は怒り、もう一方は食べながら謝る。その結果…

「……殺す」

となるわけで、

「戦略的撤退！！」

「待て！ゴラア！」

といつも通りの追いかけることという展開になってしまうのだ。周りの人達は「ああ…またか…」と思い、拳げ句の果てにどっちが勝つかをかける始末。

彼らの母がでるまで続くのだった。その後、母親同士による醜い息子自慢の抗争に巻き込まれ、ボロ雑巾の様になることは知る由も無

いのだろう。

次の日、二人はいつものように冒険者ギルドに行き、依頼を物色し始めた。

運悪くその日は依頼が少なく、数枚位しかなく諦めようとしていた時、ある一枚の依頼書が目にとまった。その依頼はいつもの短期の物とは違い、

”帝都まで護衛してくれる人を募集”

というものだった。二人はその依頼が気になり、受領してしまったのだ。

詳しい内容は合流してから話すといわれ、気にはなったが、取り敢えず準備をして東門前に向かうこととした。集合の時間まで後四時間程であった。

待ち合わせの時間となり、二人は東門前に向かうと紅髪で藍色の瞳を持った青年がいた。

青年はこちらに気がつくと思わず駆け足で二人の元によって来ると、息を整えて発した。

「すいません、失礼ですがもしかしてあなた方が帝都まで護衛してくれる方ですか？」

二人は少し動揺したが、すぐに

「ああ、そうだ。俺達があんたの依頼を受ける者だ。俺の名はダルク、こっちの目つきの悪いほうのアレスっつーんだ。よろしくな。んで、あんたの名前は？」

「ああ、これは失礼しました。自分の名はマルク、マルク・ウェストールと申します。以後お見知りおきを。」

第一話　出会いと依頼（後書き）

主人公登場！！といっても一番最後、少しだけです。次回は主人公とアレス、ダルクの紹介です。

人物紹介（前書き）

前回の登場人物の紹介です。

人物紹介

主人公

マルク・ウェストール

性別：男

年齢：16

職業：譜学術師

性格：冷静だが考え過ぎて暴走することもまちまち

詳細：既に滅んでしまったと噂されている譜学術師の末裔。彼には
沢山の秘密が……。

アレス・エクステル

性別：男

年齢：17

職業：剣士

性格：無関心。だが小さくて可愛い物を見ると壊れる（笑）

詳細：ダルクの親友、感情を表に出すことが苦手。

ダルク・ライウム

性別：男

年齢：17

職業：弓兵

性格：大らか、しかしとてつもない馬鹿。超絶馬鹿。

詳細：アレスの親友、友をバカにされるとキレる猪。

人物紹介（後書き）

次回主人公の旅の理由が明らかに……！！

第二話　旅の理由（前書き）

更新遅くてスイマセン。

今回はギャグ多めです。つーか、会話多っ！？

第二話　旅の理由

「取り敢えずお互いに自己紹介も終わりましたし、依頼の内容についてお話ししましょうか」

「ああ、頼むわ。

依頼には内容を聞いてから受領するかどうかを決める。
でいいんだよね？ んじゃ早速聞かしちゃあくれねえか？」

「はい、分かりました。

えと、そちらの方も宜しいでしょうか？」

「……好きにしろ。

基本的には聞き役だからな。
そこに居る馬鹿はおそらく、結果だけいつて理解するだろうが、俺は違う。

すまないが説明を頼む。」

「はあ……分かりました。

ではお二方の了承も得られたことですし、依頼内容について話します。

今回の依頼内容はクエストボードにも書きました通り、帝都ラムムまでの護衛をしてもらいます。

報酬は二回に分けます。」

「一回？それはどういうこつたあ？」

「先に報酬金額の半分を貴男方に払い、依頼達成後にもう半分を払います。」

「勿論旅の資金は事前に此方から支払います故」

「何か面倒くせえ払い方だな、依頼達成後に全部払うでいいのによ？」

「まあ、これが自分のやり方ですしね……」

「まあいいや、んでいくらなんだ？」

「前払いで金貨八枚です。」

「何！？金貨八枚だと！？」「」

「アレ？足りませんでしたか？
ではもう少し上乘せして……」

「待て待て！いくらなんでも多すぎだろ！？」

普通の護衛依頼でも、達成して金貨二、三枚程度だぞ！？
どんだけ常識外れなんだよ！？」

「常識外れと申されました……まだ仕事内容はございますし……」

「……追加で仕事を要求する　だからその値段ではないのか？」

「はいその通りです、アレスさん。
仕事の追加で人捜しを行ってほしいんです。」

「人捜しか……それでも多いな……。
条件が厳しいのか？」

「はい、その通りです。特徴が少な過ぎなのです。
青髪青年で特殊な武器を使います。
彼が使っている”糸”や”鋼糸”です。」

「"糸"と"鋼糸"？それはまた特殊な武器を使うな…。
しかし何故その青年を捜すのだ？
何か因縁でもあるというのか？」

「……………」

「…………話せないのか？」

「…………分かりました。」

この事を初対面のあなた方に話すのは気が引けますが、依頼を詳しく知って戴くには、致し方ありませんね……。
しかしこの話を聞いたら依頼を断ることは出来なくなります……。
それでも宜しいでしょうか？」

「…………成る程。」

聞いて否応なしに連れて行かれるか、聞かずに考えるか、か。
それ程までに重い話なのだな…。」

マルクははっきりと頷いた。

「そうだな……、貴様はどうしたい？ダルク」

「やつと聞いてくれたな！俺でもずっと無視されると結構傷つくんだぜ！？」

「ついさっきまで俺が話してたのに、何時の間にかお前さんの独壇場だよ！？」

「……？え！？何この空気？！何その意外そうな顔！？」

「すっごい心外なんですけど！」

「傷つくから、本当に傷つくからそろそろ止めてくれない（泣）。ぐれるぞこの野郎」

「いいから早く話せ、時間が惜しい。どうするんだ？」

「スイマセン。お願いですから最後まで喋らせて下さい……………（泣）」

「で？どうしたいんだ？超絶馬鹿。」

「ちょっと待つて！？超絶馬鹿って何！？取り敢えず説明を

「いいから早くしろ、超絶馬鹿。」

「はい、分かりました……………（泣）」

「ダルクは気を整えて

「コホン……………取り敢えず聞いても良いんじゃないか？

依頼を受けても、どうせ捜すんだろ？
その後のことは……まあ、なんとかなんだろ。」

怪訝そうな顔でダルクを見ながら

「何故そう思える……？」

どや顔で

「勘」

といい

アレスは呆れ顔で

「流石超絶馬鹿だな。」と納得した

「いい加減本気で泣きたくなくなって着たぞ……こんちくしょー……」

「取り敢えず超絶馬鹿^{ダルク}は置いていて話を聞かせてくれないか？」

「おいしいっ！？ちょっと待て！今俺を変な呼び方で呼
いから、黙ってる」

いいいよ、いじけてやる……」

と言って端っこの方で膝を抱えながらいじけだした。

マルクはそれをみながら

「えと…あの…そちらの方は放っておいて宜しいのでしょうか？流石にそのままと言うのは不憫な気がするのですが……」

「放っておいて構わない。どうせ超絶馬鹿だ、詳しい事を聞いても理解しないからな。後で結果を教えればすむ話だ。」
と我関せずといった雰囲気であった

「はあ…分かりました。コホン…それでははなします。」

「端的にぶっちゃけると自分は記憶が無いんです……と、いつても7、8年前からの記憶ですが、ね。」
と、彼は思いっきり間を空けて言った

第二話　旅の理由（後書き）

まさかの主人公、記憶喪失！次回遂に明らかに……！！（何が？）

にしてもダルクは馬鹿ですね。ほとんどの確率でいじられます（笑）

第三話〜記憶〜（前書き）

アレスのキャラが壊れます（汗）

こんなのアレスじゃないよ（泣）

第三話　記憶

シーン……

二人の空気が凍った。

アレスは一言

「え？」

「はい？なんですか？」

「スマン、もう一回いつけど、え？どういうことだ？」

「え？どういふことともうされましてもそのままの意味なのですが……なにか？」

アレスは表情は普通であったが、内心軽く混乱していた

（え？何この反応？え？え？俺が間違ってるのか？家族とか恋人が殺された　とか勝手に予想してたのに、斜め上をいく答えが出てきたし、予想とは舐もしない。

いや、普通に考えたら俺が悪いのは解るよ。

でもあれだけ伸ばしといて、7、8年前の記憶がないってそれだけかよっ！？

俺なんかそれぐらい前の記憶だったら完璧に思い出せないよっ！？
っーかそれそんなに重要なのか？ああ！もう訳わかんねー！）

若干キャラが壊れつつも、物凄く混乱していた。

それでも何とか続きを聞こうとしたが、「まあ、記憶が無くても平気っちゃ平気なんですけどね……（笑）」

それを聞いた途端物凄い速さで

「じゃあ、探さなくてもいいじゃんかよっ！……！」

とついに壊れてしまった。

「何だよそれ！？何なんだよそれ！？別に7、8年前の記憶だったら別に無くても大丈夫だろ！？本当に、捜す必要あんのか、それ！？」

「え……？えつと……あの……？」

「大体（笑）ってなんだよ！？そんなんだつたら捜す必要マジで無いだろ！？？」

「違うか？俺何か間違ったこといつてるか？」

「はあ……？えと……アレス……さん？」

「ああ、スマン、コイツパニックしたらキャラ壊れるんだよ。だから少し待っててくれないか？」

「え……ええ…構いませんけど……」

「待て、ダルク！！まだコイツには言いたい事が沢山あるん」

「まあ、いいからいいから。」

取り敢えずこつち来て落ち着け、な？」

青年たち移動中

「んんっ！すまない、少し取り乱してしまった。」

「少しつてどこかよ？思いっきり動揺してたじゃん？」

「五月蠅い。黙れ。隅っこでいじけてろ。」

「はいはい。わかりましたよ。」

スマンな、マルクさん。話の続きをどうぞ」

「えっと……あ……はい……分かりました。あ、後自分の事はマルクで結構ですよ。」

「応、わかったよ。マルク。そんじゃ話の続き頼むわ。」

「はい。えと、どこまではなしましたっけ？」

ズルツ（転ぶ音）

「ああ（汗）、確か記憶の話をして別に平気とかいってたな。」

「ああ、その辺でしたね。お二方には自分の職業をまだ言ってますでしたね。」

「そう言えば聞いてないな。一体何なんだ？」

「はい。自分は譜学術師です。」

「譜学術師？とは一体どういったものなんだ？」

「言うなれば、魔法使いの延長線の職業で、術式が倍以上難しいんですよ。」

「ふーん、アレス？どうしたんだ？」

「お前、解らないのか？！

魔法は譜学から派生したものなんだぞ！！それを使いこなす彼は凄いことなんだぞ！！？」

「そうなのか？」

「ああ、魔法と呼ばれる前の呼称は知っているよな？」

「いくら何でもそれぐらい知ってるぜ。楽譜だろ？」

「……………譜学だ。」

「そ、そうそう。譜学だろ、そ、それくらい、し、知ってるよ。」

「……………もういい、お前に聞いた俺が阿呆だった……………」

「そ、そんなこと無いだろ！？知らない奴だつてきつという
もういい、話を進めるぞ」 はい。そうっすね…（泣）」

「魔法使いと言うのは、譜学を簡単にして、誰でも使えるようにした代物だ。」

しかし、譜学とは人の手を一切つけず、詠唱も長い。さらには魔法以上の術式を理解し、並大抵の努力や勉強では身に付かないらしい。好き好んで使う奴はよっぽどの変人か自分の力に確固たる自信がある奴。

何らかの理由で魔法を使うのを嫌う奴しか使わん……と聞いたことがあるのだが、マルク、貴様はどれだ？」

「自分はどの部類に入るのでしょうか？恐らく変人にはいるのかな？記憶無いですし……」

「いや、解らんがな。」

「まあ、それは追々追求するとして、先程言ったとおり、自分は譜学術師です。といつても詠唱なんて覚えていませんけどね。」

「それはありえんだろ。魔法も譜学も詠唱無くしては使えんぞ……いや、まさか……詠唱破棄が使えるのか！？」

「いいえ、使えませんよ。自分は媒体を使います。」

「媒体……？そんなものが存在するのか？」

「それは自分が持つこの魔術書です。いえ、正確には譜学書ですけどね。正式名称はわかりませんがこの本の名前は“グインデールの譜学書”と呼んでいます。」

「譜学書だと？魔術書のようなものなのか？それに呼んでいるとは一体……？」

「まあ、同じようなものと思っていて下さい。書かれている文字は恐らく古代文字ですから断定は出来ませんけど……」

「少し待て！今あつさりと大変な事を言わなかったか？つーかもう驚く事に疲れた。」

「……？話を続けますよ？呼ばれていると言うのは、著作者が複数いて、この”ヴィンディール”というのが一番多いのです。そして一番謎なのがこの文字、”自分しかよめない”ということなのです。」

第三話　記憶　（後書き）

今回で彼の謎が見え隠れします。

やはりダルクは馬鹿です（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1753y/>

魔法 = 譜学？ 記憶の先には何がある？

2011年11月29日20時51分発行